



野口研究所本館入口



拠点事務室前のドアにある看板プレート

『野口記念医学研究所共同研究センター ニュースレター』発刊のご挨拶

文部科学省は、世界の新興・再興感染症研究の推進と感染症分野の研究人材育成を目的として、流行地の研究機関と提携して日本人研究者が常駐する体制で共同研究を実施するプログラムを 2005 年度から開始しました。これまでに 8 カ国、12 拠点が設置され、研究が進められています(<http://www.crnid.riken.jp/jgrid/>)。東京医科歯科大学は 2008 年度に、このプログラム第 11 番目の拠点として採択され、ガーナ共和国の首都アクラにある野口記念医学研究所（以下、「野口研」）にセンターを開設し、ウイルス学の教員（井戸栄治）と寄生虫学の教員（鈴木高史）を派遣し、ガーナ側研究者と研究や人材育成に関する共同事業を行っています。しかしながら、担当の教員が所属する研究室のメンバーや一部の担当事務職員を除いて、実際にどんな活動をしているかまるで分からないとか、名前は聞いたことがあるけれど詳しくは知らないというご意見を本学のいろいろな方々からお聞きしました。そこで私たち日頃の研究をご紹介しますと共に、ガーナの医療事情や、日本とは全く異なった文化を持つガーナの日常生活などについて、少しでも知って頂くべく拠点からニュースレターを発刊することに致しました。このレターでは、普段国内に居ては目にすることが少ない発展途上国における研究協力活動の情報を写真を交えて、なるだけ『平易、かつ楽しく』をモットーに提供したいと考えております。また刊行の頻度としては、月 1 回で毎月 20 日前後の配布を予定しております。皆様のお仕事の合間にお気楽に読んで頂き、ご意見、ご感想、ご質問などをお寄せ頂けたら幸いです。何卒よろしくお願い申し上げます。（野口記念医学研究所 拠点長 井戸栄治）



寄生虫学
鈴木高史特任准教授

事務補助員
志村まゆみ

ウイルス学
井戸栄治特任教授(拠点長)

ガーナ拠点活動紹介 - ガーナにおける現行エイズ治療法の評価

今回は第1号ということで、まずはウイルス学部門で行われている研究の紹介から始めたいと思います。主な研究テーマは世界的に大問題になっている HIV/AIDS です。現在アフリカの多くの国々では、患者さんが HIV 陽性と診断され、免疫担当細胞である CD4 細胞数が減少していることが確かめられますと、WHO 推奨の逆転写酵素阻害剤 3 種類からなる薬剤投与の治療が開始されます。ところが、その薬剤が現在その地域で流行している HIV の株に本当に効果があるのか、またその薬剤に耐



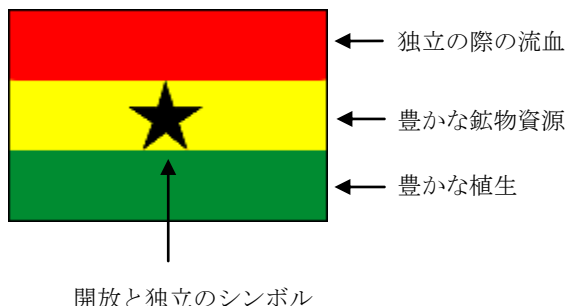
性の変異は一体どれくらい広がっているかなどについて、研究設備や実験機器の不足などが理由となって殆ど検討評価されることなく投薬が続けられるという問題点が指摘されています。

つまり現行治療法をウイルス学的観点から正しく評価して、改善点があればそれを一刻も早く提言することを目指している研究です。ウイルス部門ではその他にも様々な研究を行っていますが、それらに付きましては今後ご紹介してゆくこととし、次号では寄生虫研究について紹介いたします。(井戸栄治)

ガーナ共和国

ガーナ共和国はアフリカ大陸の西部に位置し、赤道の北 750 キロに位置し、国土上をグリニッジ標準時線が通っています（日本との時差±9 時間）。雨期と乾期の二つの季節があり、気温は年間を通じて約 21～32℃です（衣替えの必要がなく楽です）。人口は日本の 6 分の 1（約 2,422 万人・2010 年）、国土は日本の 3 分の 2（238,537km²）、一人当たりの GNI は 1,190 ドル(2009 年)で世銀の分類では中所得国となっています。日本でガーナというとチョコレートを連想される方が多いと思いますが(カカオ生産量は世界 3 位・2008 年)、両国は拠点活動をはじめとする研究分野での共同事業はもとより、皇太子殿下のご訪問、クフォー前大統領と小泉元首相との親交、経済・文化・スポーツなどあらゆる面で友好な関係にあります。安定した議会制民主主義の政権のもと 2007 年には海底油田の発見もあり、近年、経済・インフラの成長はめざましく、日本企業の進出も増加傾向にあります。ガーナは国旗が示す通り、豊かでプライドある国民性を持つ国家です。サハラ砂漠以南のアフリカの主要国家として、経済のみならず様々な分野において今後も積極的に発展を続けてゆくと思われます。

ガーナの国旗



緑色部分がガーナ

最近の動向から - ガーナの救急医療（山本保博先生の講演会より）

9月13日、野口研コンファレンスホールにて、東京臨海病院の山本保博先生による「日本における救急医療体制の現状と将来」についての講演がありました。日本とガーナの救急医療体制を比べると、ガーナは、まだまだ充分ではありません。最近でこそガーナでも救急車を目にするようになりましたが、救急の場合、多くは次のような措置をとっています。まず歩行者が車と接触してケガをしてしまった場合、ケガをさせた車の運転手は、とにかくケガ人を自分の車に乗せて病院へ運び込みます。急病の場合も同様で、自家用車・タクシーなどで病院へ運びます。



病人を搬送中の車は、ウィンカーを点滅し、クラクションを鳴らしながら他の車を追い越して病院へ急行しますが、治療開始までどうしても時間がかかってしまい、救急医療としてこれで本当に良いのだろうかといつも思っています。ちなみに、ガーナの救急電話番号は「193」ですが、講演参加者に聞いてみたところ、救急車(193)・警察(191)・火事(192)の際の緊急番号があることは知っているけれど、どれがどれかわからないそうです。山本先生は、コレブ病院などでも講演をされました。

ガーナの日常生活風景より - 伝統的ガーナ料理「フーフー Fufu」

ガーナの代表的な食べ物といえば「フーフー Fufu」です。

作り方も、食感も日本のお餅にそっくりなので、日本人にもファンが多いようです。



(1)材料のプランテーン
(バナナに似ている)と
カッサバ(芋類)を茹でて



(2)日本の臼と杵のような
道具でつくこと数分



(3)トマトベースのスープと共に
いただきます。

これは野口研売店で注文した魚のスープとフーフーですが、魚の姿作りが食欲を。。。魚以外にもチキンやビーフ、ナスなどの野菜とともに煮込んだスープもあります。

咬むというよりも飲み込むようにして食べます。右手を使ってフーフーを一口サイズにちぎり、スープをからませて上手に口に運びます。慣れないと、スープが手をつたって腕までたれてきますが、スプーンを使うと味が違ってしまうとのことで、日本の方でも手を使って食べられる方が多いです。
(左手を使わないのがマナーです)

暑い国の食べ物なので、大抵のガーナ料理は辛いのですが、どの料理もおいしいです。
日本にもガーナ料理が食べられるお店がいくつかあり、フーフーはおいにありますので、
ご興味のある方はぜひお試しください。

編集後記：今回は初めてのニュースレター作成ということで、何かと不慣れなことが続出でした。
今後、より充実したものをお届け致したく、皆様の積極的なご意見、ご質問をお待ち申し上げます。
制作：志村、 文責：井戸、鈴木 ご意見などの送り先：shimura.kyoten@gmail.com
